

近代語資料としての「真景累ヶ淵」「緑林門松竹」

増井典夫

一、はじめに

近代語の研究を日本語史研究の一環と考え、記述を進めていくには、近世から明治への口語の流れを、無理なく記述できるようにしていく必要があると考えてきたが、現実には明治初期の、特に口語資料が数量の点で十分にあるとは言えず、その時期の記述には難しい点がある。また、明治期の資料の扱いや分析の手法などで、研究について不十分な点もまだまだ残っているように思われる。今回は三遊亭圓朝の落語速記本を取り上げ、問題の一端に触れる。

二、「日本国語大辞典」にみる「真景累ヶ淵」の扱い

近代語資料としての落語速記本であるが、三遊亭圓朝の「怪談牡丹燈籠」についてのみは、資料性の研究と認識がかなりなされているが、他の作品についてはよく知られていない点もあるのではないかと思われる。

特に気になるのは、「真景累ヶ淵」という作品の扱いである。

落語速記本の刊行は明治一七（1884）年七月の「怪談牡丹燈籠」が初めてである。逆に言うと、「明治一七年以前の資料として扱えるものはない」ということになる。

ところで、『日本国語大辞典』の記述をみると、「初版」（1972年12月）での「主要出典一覽」では「真景累ヶ淵」は、

一八六九年初演

としている。（1869年≡明治二年）

この年、それまでの「道具噺」から「素噺」に切り替えてこの作品を演じ始めたといわれており、その記述自体は間違いないかもしれないが（ただし、この作品は1859年の作ということであり、口演自体はなされているのであるから初演というのはどうか）、1869年の言語資料として残っているわけではなく、その年の資料として扱えるということでは、全然ない。

一方、『日本国語大辞典』第二版での『第一巻 別冊』（2000年12月）の「主要出典一覽」及び『別巻』（2002年12月）の「出典一覽」では、「成立年・刊行年」を、

一八六九頃

としている。こう記述してしまうと、資料の説明としては、はなはだしく不適切なものとなる。

さて、この「真景累ヶ淵」の初版本（明治二一・1888年五月刊）には、

三遊亭圓朝口述

小相英太郎筆記

と記されている。しかし、『日本国語大辞典』にはその記述はない。『日本国語大辞典』がよっている『明治文学全集』にも「據小相英太郎速記」と明記してある(335頁)のであるが。(怪談牡丹燈籠)及び「鹽原多助一代記」については、『日本国語大辞典』は第二版では、「別冊」の「主要出典一覽」には「円朝の口演を若林珪蔵が筆記」と記載している)。ところで『明治文学全集』(1965年6月刊)での「真景累ヶ淵」の解題(興津要執筆)を見ると、

『やまと新聞』に連載になったと云うが、東京大学の明治新聞雑誌文庫において調査した限りでは、ついに発見できなかった。また単行本も発見できなかった。したがって、本書においても、この作品だけは、『圓朝全集』(春陽堂版)によらざるをえなかった。

とある。この「真景累ヶ淵」が収められている『圓朝全集』巻一は大正一五・1926年九月刊であり、その「真景累ヶ淵」は明治二五年刊の単行本によっている。(『明治文学全集』に収められた他の作品、「怪談牡丹燈籠」「鹽原多助一代記」(明治一八年一月刊)及び「英國孝子之傳」(明治一八年七月刊)は初版本、「名人長二」は『中央新聞』掲載(明治二八年四月〜六月)分によっている)。

「やまと新聞」は明治一九年一〇月七日に創刊されたもので明治二五年頃まで速記による圓朝落語を掲載した。ただし、「明治二〇年八月一日より二二年四月三〇日まで欠号」となっている(東京大学蔵『明治新聞雑誌文庫』)。国立国会図書館蔵本でも同様)。この欠号部分のみ、掲載された作品が確認できないことになっている。

「予告」から判断するに、「真景累ヶ淵」が明治二〇年の九月より「やまと新聞」に掲載されたことは確かであろう。しかし、現物が見られない以上、明治二〇年の資料としては扱いにくく、初版本が刊行された二一年の資料として扱うべきか。

なお、この当時の落語速記は寄席で記録したものをほとんど間を置かず、新聞などに掲載するのが普通であったと言われている。実際の所、「真景累ヶ淵」には次のようなくだりもある。(引用は『日本国語大辞典』がよっている『明治文学全集』による)。

ちと模様違ひの怪談話を筆記致しまする事になりました、怪談話には取わけ小相さんがよかろうと云ふのでございますが、傍聴筆記でも、怪談のお話は早く致しますと大きに不都合でもあり、又怪談はネンバリくと、静かにお話をすると、却って怖いものでございますが、話を早く致しますと、怖みを消すと云ふ事を仰しやる方がございます。

(二十一)

小相は若林の門下であり、明治一九年からの「やまと新聞」掲載作品での速記で評価されるようになった人物である。

三、「みたいだ」の用例について

『日本国語大辞典』の第一版にはなく、第二版で「みたいだ」の例として新たに加えられたのが「真景累ヶ淵」(1869頃)と用例の箇所にも記されている)での例である。

お前のやうに子供みたいにあどけなくつちやア困るね。(十九、『明治文学全集』、236頁上段)

これを「みたいだ」の初出例としているのだが、同作品の初版本では次のようになっていた。

お前の様に子供みたいにあどけなくちやア困るね、(初版本、61頁)

促音の添加も気になるところである。

なお、「みたいだ」の例として原口裕は、「『みたようだ』から『みたいだ』へ」(静岡女子大学国文研究7、1974年3月)で、巖谷小波「五月鯉」(明治二十一年)の例、

オホ、、、姉さんいやだ、オバアさん見たいに(第十)

を挙げている。(この例は『日本国語大辞典』では取り上げていない)。

「また、「みたいだ」が明治二〇年頃からのものだということは、原口の他、宮地幸一、田島優、田中牧郎等複数の研究者が論じているところである。

四、「緑林門松竹」と「やまと新聞」

三遊亭圓朝の作品である「緑林門松竹」は、「真景累ヶ淵」同様、

三遊亭圓朝口述

小相英太郎筆記

となつてゐる作品である。

さて、ここで「やまと新聞」の創刊時（明治一九年一〇月）から明治二〇年七月までに掲載された作品を確認しておく。

「松の操美人の生理」（明治一九・一〇・七〜一九・一二・二）

「蝦夷錦古郷の家土産」（同一九・一二・三〜二〇・一・一九）

「鶴殺疾刃庖刀」（同二〇・一・二〇〜二〇・三・一二）

「月に謡萩江の一節」（同二〇・三・一二〜二〇・六・二五）

「敵討札所の靈驗」（「やまと新聞」には明治二〇年六月二六日号から掲載）（完結日は不明だが、明治二〇年の八月か九月かと思われる）

以上の作品は、小相英太郎筆記のものである。

さて、「緑林門松竹」の初版本の末尾広告には次のようにある。

やまと新聞にて大喝采を得ました侠賊の傳記にして同氏ハ其前道具話して致しました忍ヶ岡義賊の隠家と申したお話を緑林門乃松竹と外題を改め咄しの條へも餘程改良を加へまして御聞に（ではない）御覽に入升から何卒御買求を願升

この記述からみても、「やまと新聞」に「小相英太郎筆記」として掲載されたことは間違いないところであろう。

この「緑林門松竹」は初版本の刊行が明治二十二年五月であり、「やまと新聞」には、東京大学の明治新聞雑誌文庫などで欠号となっている期間に、「真景累ヶ淵」に続いて明治二十二年の一月頃から四月頃に掲載された、とみるのが一番可能性があると考えられる。

次に、欠号となっている部分に続く作品を確認するが、まずは「操競女学校」という作品で、「やまと新聞」には明治二十二年四月二十五日号から六月二十二日号まで掲載されている（酒井昇造の筆記による）。

その次には、「粟田口霑笛竹」（二一・六・二三～二一・一一・八掲載）という作品が、やはり酒井昇造筆記によつて掲載されている。この「粟田口霑笛竹」は、「やまと新聞」掲載後、間を置かず明治二十二年二月に初版本が刊行されている。

その他、次のような作品が、「やまと新聞」掲載後に間を置かず単行本として刊行されている（いずれも酒井昇造の筆記による）。

「文七元結」（二二・四・三〇～二二・五・九掲載）（二十二年六月刊）

「福祿寿」（二二・五・一〇～二二・五・一八掲載）（二十二年六月刊）

このように、「やまと新聞」に掲載後、間を置かず単行本として刊行されるのは普通にあつたことであり、「緑林門松竹」も「やまと新聞」掲載後すぐに単行本として刊行されたとみてよいものであろう。

五、『圓朝全集』の資料性について

「縁林門松竹」は、冒頭（いわゆる「枕」として）、次のように語り出される。

圓朝は昨年わたじきくねんの暮くれは咽喉いんご加答爾かたるとの病まひに罹かりまして受持うけもちの寄席よせは勿論もちろん御最良ごひいきで御招おまねきを蒙かうむる御座敷ござまをさへ御断ことほりを申上まをげて療養りょうやうを致いたす位くらいゆるゑ當新聞あとうじんぶんの筆記ひやくも據よんじろなく門弟もんていの圓生えんせいに以前いぜん圓朝えんてうが辨べんじました辨天べんてんといふ御咄おんはなしを代講だいかう致いたさせました處殊こゝの外御ほか機嫌きげんに協かひ有あ難がたい仕合しあひござりました、未だ全快ぜんくわいには至いたりませんが大おほに快こころよい方はうから其その以前いぜん道具話だうぐわして致いたしました忍しのぶが岡義賊おかぎさくの隱家かくれがと申まをすお咄はなしを初はつ々しんくみじり敷縁しきゑんの林門りんもんの松竹しょうちくと外題げだいいを更あらため咄はなしの條すぢにも餘程よほど改良かいりやうを加くわへまして御聞おきに入いり

以上の部分の、初版本と『圓朝全集』との主な校異（句読点の有無等を除く）を示す。

	初版本	圓朝全集 (二カ所)
①	圓朝	私
②	いんこふ	いんこう
③	御招 <small>ごまね</small> き	お招 <small>おまね</small> き
④	御断 <small>ごたほ</small> り	お断 <small>おたほ</small> り

⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
入升	御聞 <small>おきき</small>	條 <small>まち</small>	更 <small>あらた</small> め	初々 <small>はつと</small> 敷	お咄 <small>はな</small> し	其	未だ	協 <small>かな</small> ひ	御咄 <small>おはな</small> し	ゑんせう	據 <small>よんどころ</small> ろなく	ひつき	位 <small>くらゐ</small> ゐ	申上 <small>まうあ</small> げて
入 <small>い</small> れ <small>ま</small> す	お聞 <small>おきき</small>	筋 <small>すぢ</small>	改 <small>か</small> め	初々 <small>はつと</small> しく	お話 <small>おはな</small>	其 <small>そ</small> の	まだ	かなひ	お話 <small>おはな</small> し	ゑんしやう	據 <small>よんどころ</small> なく	ひつき	くらゐ	申上 <small>まうあ</small> げて

わずか数行の部分に、ざっとこんな校異が認められる。

角川書店から出ている『三遊亭円朝全集』（1975年刊）の場合などは、「現代かなづかい」に「漢字は新字体」としているの、一目で明治時代語資料としては扱えないことがわかるが、『圓朝全集』の場合も、明治時代語資料としては、参考資料としてしか扱えない、と考えた方がよいと思われる。『圓朝全集』が刊行された大正末頃の資料としては、活用価値があるかもしれないと思われるが。

なお、「咽喉カタル」については「真景累ヶ淵」（八十二）にも、

久しく休み居りました累ヶ淵のお話は、私も昨冬より咽喉かたる加答兒かたるでさつぱり音聲が生まれませんから、寄席せきを休む様な
譯で、『明治文学全集』318頁）

などとあるところであり、この点からも、この「緑林門松竹」という作品が「真景累ヶ淵」に続く作品であることがうかがえるとされる。

六、おわりに

先にも触れたが、明治初めから一〇年代頃までは、なかなか十分な口語資料が見られない時期である。日本語学において、圓朝の速記本の、口演との乖離を問題にされたりすることがあるが、それは、なんとか、年代的に資料の手薄な明治初めから一〇年代頃の資料として圓朝速記本を扱いたい、という気持ちの表れかもしれないとも感じているところである。しかし、速記本は速記本であり、圓朝速記本も、初出あるいは初版本の刊行時の資料で速記者の手が入ったもの、とし

て扱うほかないものと考ええる。その点では、「口演との乖離云々」は考慮の必要がないものと私は考えている。

主な参考文献

- 永井啓夫「三遊亭圓朝」(1962年12月、青蛙房)
- 進藤咲子「漢語サ変動詞の語彙からみた江戸語と東京語」(『国語学』54、1963年9月)
- 進藤咲子「三遊亭圓朝の語彙」(講座日本語の語彙)6、1982年2月、明治書院)
- 山本正秀「近代文体発生の史的研究」(1965年7月、岩波書店)
- 越智治雄「円朝追跡」(『国語と国文学』、1968年4月)
- 宮地幸一「へ…みたやうだ」から「へ…みたいだ」への漸移相」(『学芸国語国文学』3、1968年7月)
- 福岡隆「活字にならなかった話」(1980年11月、筑摩書房)
- 松井栄一「出逢った日本語・50万語」(2002年12月、小学館)
- 宮島達夫「『日本語大辞典』(第二版)における初出文献の改訂」(『近代語研究』11集、2002年12月、武蔵野書院)
- 田島優「漱石作品における語の習熟——「みたようだ」から「みたいだ」への変遷——」(田島毓堂編『語彙研究の課題』所収、2004年3月、和泉書院)
- 清水康行「速記と言文一致」(『国語論究』第11集、2004年6月、明治書院)
- 田中牧郎「雑誌『太陽』」(『日本語学』臨時増刊号、2004年9月、明治書院)
- 『文学 増刊 圓朝の世界』(2000年9月、岩波書店)

(文学部・文学研究科教授)